

スペースリゲイナーの再考

○中尾哲之、麻生郁子

なかお小児歯科（福岡市）

小児歯科医療の役割は、小児の顎口腔系を早期から管理することにより健全な永久歯列を誘導することにある。

しかしながら、その過程において健全な成長のルールから外れるような出来事の起こることがある。例えば乳歯がう蝕や外傷等により欠損もしくは欠如した場合、後方の臼歯が近心に傾斜や移動して来る。そのため後継永久歯萌出スペースが減少し、萌出出来ずに埋伏したり、歯列外に萌出して歯列不正を招くことは日常臨床でよく見受けられることである。

このようにスペースが減少した場合、永久歯萌出余地を回復するためにスペースリゲイナーを使用するのはご存じの通りである。スペースリゲイナーには可撤性と固定性の2種類あるが、可撤性のものはよく使用されて来た。

しかし、可撤性のものには装置そのものの色々な欠点がある。まず床や維持装置があるため大きくなり異物感が大きいことや下顎の場合、拡大ネジを使用すると床が厚くなるため舌房が狭くなる。また側方歯群交換期になってくると問題が起こって来るケースがある。維持装置として付与している唇側線が永久犬歯等萌出のため合わなくなって来たり、歯槽堤粘膜膨隆のため床が合わなくなり、疼痛を訴えたり、褥瘡性潰瘍を造って来ることがある。そのため本院でも調整、修理を繰り返して使用している。

ところが固定性のものだとこれらのかなりの問題点が解消することが出来ると考えられる。これらの問題点を改善すべくスプリングを用いた固定性のリゲイナーを考えて本院で使用しているので紹介する。

ほぼ正常な永久歯列が完成した症例の乳歯列期の状態について

○品川光春、品川知通子

しながわ小児歯科医院（佐世保市）

咬合誘導の目的は、正常な永久歯列咬合の完成であるが、乳歯列期がどのような状態であればいいのかを明確にすることも必要である。そこで今回、矯正治療は行わずにほぼ臨床的に正常な永久歯列の1級咬合が完成した症例について検討してみたので、その結果について報告する。

【対象および方法】対象は、1986年6月から1993年2月までに初診として来院した患児のうち、乳歯列期(2A)から永久歯列の完成まで(4A)まで観察できた95例の中で、矯正治療は行わずにほぼ臨床的に正常な永久歯列の1級咬合が完成した7症例(7.4%)について検討した。7症例中、男児5例(71.4%)、女児2例(28.6%)、初診時平均年齢は2歳10か月、最終観察時平均年齢は14歳9か月、平均観察期間は11年11か月であった。方法は、経年的に採取した各症例の口腔内写真と診療録にて調査した。

【結果および考察】①前歯部の被蓋関係は、乳歯列でもほぼ正常で、永久歯列とほぼ同様の傾向が認められた。②乳歯列では上顎の歯間空隙は、7例とも僅かであっても存在した。下顎は僅かでもみられたのが6例(85.7%)、1例(14.3%)は認められなかった。しかしながら、永久歯列では上下顎ともすべてほぼ正常な歯列となった。③正中は、乳歯列では一致が2例(28.6%)、ややずれが認められたのが4例(57.1%)、不一致は1例(14.3%)認められた。永久歯列では一致しているのは4例(57.1%)、ややずれが3例(42.9%)認められ、乳歯列期での正中の多少のずれは、永久歯列では改善傾向が認められた。